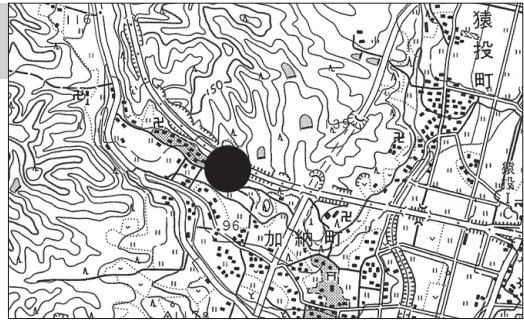


よりもと 寄元3号墳

所在地 豊田市加納町字寄元地内
調査理由 猿投グリーンロード建設
調査期間 平成12年4月～6月
調査積 600 m²
担当者 花井 伸・武井繁樹・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「豊田北部」)

調査の経過 寄元古墳群は、3基以上からなる古墳時代後期の群集墳である。猿投グリーンロード拡幅工事に伴う事前調査として、愛知県道路公社から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた。平成11年度に道路建設予定地内での古墳の範囲調査を実施し、3号墳・4号墳の存在を確認し、4号墳については本調査を行い、7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる小石室を確認した。次いで平成12年度は、3号墳の発掘調査を実施した。

立地と環境 猿投山南麓に位置する。一帯には、北西から南東方向に舌状に伸びる尾根がいくつかあり、それら尾根上に古墳群は形成される。付近には、藤山古墳群や池田古墳群などの後期古墳が点在している。

調査の概要 墳丘は、風化花崗岩を基盤とする尾根筋に平坦面をつくり、その上に土砂を積み上げて構築される、直径約12mの円墳である。平坦面をつくる際に、墳丘底面規模に合わせて周溝を掘るが、明瞭に確認されたのは山頂側のみである。石室の構築と同時に側壁石材の背面から盛土を行うが、石室東側中層では明灰色の地山土と黒色土が厚さ約5cmずつ交互に積んでいるのが確認された。なお、石室東側下層や石室西側ではそのような工法をとっておらず、約20cmずつ土を盛っているのが観察された。そして石室完成後、全体を覆うように一気に土を盛り上げ、墳丘を完成させる。また石室開口部から左右に人頭大の円礫を円弧に配し、列石とするが、土層の状況からみて、外護列石とは異なり、盛土の際の土止めを目的として配置されたものと考えている。ところで、石室前方では扇状の前庭部が確認されたが、そこに通じる墓道については不明である。

石室は、全長5.2m、最大幅1.4m、推定高1.2mの規模である。地山に全長5.5m、幅2.6m、深さ20～30cmの土坑を掘り、奥壁2枚を並べる。基底石は亜角礫を用いるが、その配置は、東側壁では直線的であるのに対し、西側壁は若干胴張形を呈し、左右非対称である。側壁石材は西側壁の方がやや小さめで、傾斜角は東側壁が85°、西側壁が75°である。閉塞石は円礫を使用するほか、櫛石状のものを開口部に据え置く。床面は拳大の川原石を敷き、礫床とする。石室は横方向から盗掘を受けており、天井石のほとんど、東側壁の一部が紛失または移動していたが、副葬品にはほとんど影響はなかったとみられる。

出土遺物は、石室内からは勾玉1点、金銅製耳環2点、提瓶1点、鉄鏃、鉄刀の一部が出土した。また、人骨とみられる骨片も確認され、状況から被葬者が2人であった可能性が考えられる。石室前庭部からは、細かく破碎された須恵器が出土し、6世紀後半から7世紀前半の範囲で2時期に分かれそうである。ところで、墳丘裾の土坑からは灰釉系陶器・伊勢型鍋の小片が出土したほか、調査区一帯からは条痕文系土器片が採取された。(永井邦仁)



調査風景（南東から）



石室内遺物出土状況（東から）



石室全景（南西から）



石室奥壁



石室西壁



石室東壁



礫床



基底石（南西から）